

津波に気付かぬ恐れ 見える情報届けよう

映像作家として、ろう者や難聴者を題材にドキュメンタリー作品を撮っている女性がいる。自身もろう者の今村彩子さん(32)＝愛知県＝だ。映像作家デビューは12年前。現在は、東日本大震災の被災地で取材を続ける。「体の揺れで分かる地震は気付いても、聞こえないろう者は津波に気付けない」。映像を通して、災害現場のろう者の声を伝える決意だ。今月4日、沖縄で初めて講演した今村さんに、ろう者の現状を聞いた。

(川上夏子)

被災地取材の今村さんに聞く

昨年3月11日、名古屋で仕事をしていた今村さんは揺れに「いつもの地震かな」と思っていた。しかし夕方、テレビで見た津波の映像に驚き、胸が押しつぶされそうになった。その後、テレビや新聞では連日、被災地の様子が伝えられていたが、「ただ一つ、分からないことがあった」。被災地のろう者の情報が入ってこなかった。地震は、揺れを体感するのでろ

う者も分かる。だが、津波警報は聞こえない。今村さんは「ろう者は生存しているのだろうか。現地に行き、取材して社会に伝えることが責任だ」と思った。震災から11日後の22日、宮城県に入った。避難所に行き、津波で家を流されたろう者の夫婦など4人と会った。夫婦はあの日、自宅にいた。大きな揺れの後、地域の男性が駆け付け「津波が来る。家

にいたら駄目だ」と身ぶりで教えてくれ、慌てて逃げた。自宅はその後、津波にのまれた。

避難所でも、夫婦には放送が聞こえず、物資や食料配給の情報が伝わらなかった。避難所のろう者は、聴者の様子に神経をとがらせていた。彼らが並んでいたら、食べ物配給かと思いい、列の後ろに並んだ。うたた寝もできず、夫婦は心が休まる日がなかったという。

福島で取材していた昨年4月、今村さんは震度6の揺れに襲われた。生まれて初めての大きな地震に驚いたが、津波を知らせるサインに気付けずにいた。

今村さんは「今の社会では、ろう者は自分で命を守れない」と痛感した。聴覚障がい者にとって最も怖いことは、「情報がなくて」と。「張り紙、手話や身ぶり手ぶりなど、目で見える方法に変えて、情報を与えてほしい」と聴者に訴える。

一方、「ろう者は見た目では分からない。普段の生活で、自分が聞こえないことを知ってもらう必要がある」と聴覚障がい者自身が、地域に発信することも重要と指摘する。

震災から1年が経過。被災者は、避難所から仮設住宅に移った。「周囲の人とつき合いを深めることが大事。聴者でも、どこにいても同じ。被災した方に力メラを向けるのは辛けれど、伝えなければいけない」と今村さんはいう。被災地での取材内容は、1本の映画にまとめる予定。7月の完成を目指している。



「ろう者の現状を伝えたい」という今村彩子さん＝那覇市首里石嶺町・県総合福祉センター